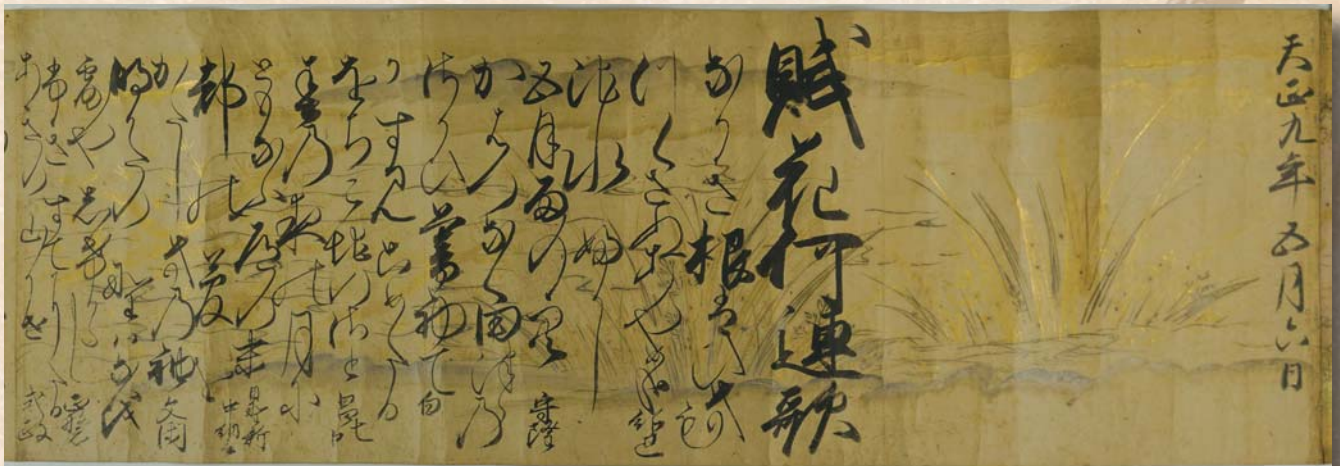


国文研ニュース

No.46
WINTER 2017



賦花何連歌 (天正九年五月六日)

目 次

● メッセージ	
国際化とデジタル化の未来へ向けて	ワトソン・マイケル 1
● 研究ノート	
禅の文化から教えに、そして文学へ	ダヴァン・ディディエ 2
和紙を愛でる：古文書修復技術の融合 －マレガプロジェクト・ワークショップ－	湯上 良 4
● トピックス	
第9回日本古典文学学術賞受賞者発表	6
第9回日本古典文学学術賞選考講評	6
協定等の締結について	9
人命環境アーカイブズの地平 －福島県双葉町における保全活動と地域持続－	西村慎太郎 10
平成28年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会	恋田 知子 11
大学共同利用機関シンポジウム2016 「研究者に会いに行こう！－大学共同利用機関博覧会－」参加記	青田 寿美 11
第40回国際日本文学研究集会	陳 捷 12
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況	12
● 調査収集事業の見直しについて	13

国際化とデジタル化の未来へ向けて

ワトソン・マイケル（国文学研究資料館運営委員、明治学院大学教授）

私事にわたって恐縮であるが、1975年学部を終え、修士課程進学前の1年間、私はオーストリアと国境を接するイタリア北部山岳地帯の片田舎で英語教師の職を得た。まともな本屋すらないという小さな町であった。本を買うため私は国境を越えてオーストリアのインスブルックまで始終出かけた。所持しているウェイリー訳源氏物語には、22歳の若書き文字でInnsbruck 1976と書いてある。丁度40年前である。これが私のウェイリー訳源氏物語との出会いであった。

そのアーサー・ウェイリーが源氏物語に興味を持ったのは大英博物館東洋部で源氏絵に出会った為だという話が伝えられている。真意のほどはわからないが、十分あり得よう。とすると、ウェイリーは、物語絵の魅力から始まって、遂には日本語を習得し、この長大な物語を英語に訳すという偉業を成し遂げたということになる。手にした源氏絵にそれだけの吸引力があり、繙いた源氏物語にそれだけの力があつた。

公開されたばかりの「人文学オープンデータ共同利用センター準備室」のページに入り込んでみた。「日本古典籍データセット」の「書名一覧」から『源氏物語団扇画帖』を開く。そのページのサムネールをクリックするだけで、全容がパソコンモニターの上に拡がる。あまりの美しさに瞬時息をのみ、はやる気持ちで目に付いたページをクリック拡大してみると、なにやら右の腕に衣を抱えた光源氏らしき人物が、床に臥す小君とおぼしき童に目を落としているのである。金泥の雲や松の緑、装束の青や赤、黒い格子と白っぽい妻戸という色彩世界が目に飛び込んでくる。そのめくるめく画像世界に驚愕し、この団扇様のフレームに描かれた源氏世界に目を奪われると同時に、私自身やウェイリーのこの物語との最初の出会いに思いを馳せたわけである。

世界中のあらゆるパソコンからアクセスすることが出来るこの一枚の絵に、日本語を一言も解さない思春期の多感な子供が会わないと、誰が言えようか。日本のアニメに夢中になっている若者達がこの美しい画像世界に足を踏み入れたら、たちまち虜になってしまうのではないか、少なくとも私が15歳の時にこれだけの世界に出会っていたら無条件でのめり込んだと思われる。まさに理想的な異文化へのポータルである。

学術的でありながらも、一般にも開かれているという

ポータル・サイトとして、30のリンクを持つ「電子資料館」には、充実感が横溢している。全てに言及することは出来ないが、以下気が付いたことを少し記してみる。

はじめてこの漢字だらけのインデックス・ページを訪れる非日本人の目に入るのは、「English」と書かれたボタンであろう。データベースの“詳細”を手っ取り早く知りたいという、はやる気持ちでこのボタンを押すと、国文研そのものについて英語で説明してあるページへと飛んでしまう。ここで、かなり挫かれてしまう。いっその形式の英語ページへのリンクはやめにして、インデックス・ページをバイリンガルにすることができないであろうか。英語母語者としては、十分可能だと思われるのであるが。

おそらく多くの非日本人研究者が、検索ページが英訳されている「日本古典籍総合目録DB」などは使いやすいと感じていよう。それでも小さなところで初学者は躓くのではなからうか。例えば、「年代」が"Year"と英訳されている。海外の研究者や学生は、ここで迷わず西暦を記入するであろう。例えば「明暦五」などと入れなければならないとは"Year"の英訳からは思いも付かない。

特筆したいのは、「古典撰集本文データベース」である。特に本年は海外の古典講座のシラバスに良く登場する人気のある伊勢物語と土佐日記などが加わり、当該データベースの価値は日ごとに高まっているとさえ言える。例えば「もみち（紅葉）」という検索語を入れて辿り着く目指す作品の該当箇所を翻刻、そして「画像を見る」をクリックすることで即座にその箇所の写本や版本を見る事ができる事であるが、これは、日本の外で日本研究に関わり、変体仮名を学ぼうとする研究者や学生達には、まさに理想的なツールだと思われる。ただし、ナビゲーションはいまひとつ使い勝手が悪く、また英語説明文の質は、データベースによってまちまちである。

国文学研究資料館の貴重なデータベースは異文化へのポータル・サイトとして人種国境を越えた全ての人の手に届く時代となった。このようなポータル・サイトは、将来はそれ自体がひとつの文化遺産としての価値を持ち得るものとなるかもしれない。だからこそ、そこで使われる英語は、単語ひとつや文章のニュアンスに至るまで、妥協を許さないネイティブ英語的な心意気が求められているのではないか。

禅の文化から教えに、そして文学へ

ダヴァン・ディディエ（国文学研究資料館准教授）

大多数の宗教が世俗社会に対して二つの態度をとっている。一方は、修行が妨げられないように、或いは穢れを避けるため、出来るだけ離れようとする傾向がある。一方は、絶対的な存在（神、法など）の教え又は指令を普及するため、或いは人々を守ったり、恵みをもたらしたりするため、関わりを持つようとしている傾向もある。仏教の場合は、難解な教義に基づいた厳しい実践が必要とされていて、長い間遁世的な立場が優先されてきた。仏教の修行者は社会の基本要素である家から出て、「出家」して、僧団に入ることが求められた。しかし、それでもこの僧団が誕生してから今日にいたるまで、様々な形で俗界との交流を持ち続け、この関係の歴史が仏教の歴史の大変重要な面である。日本に絞るだけでも、宗派や時代によって出家と在家の関わり方は多種多様であった。臨済宗の場合は、鎌倉時代に伝授されてから中世末期まで、禅僧と在家の交流は殆ど上層社会に限っていた。数少ない例外を除けば、僧の交際相手は主に主権を握っていた公家や武士であったといえる。彼らは、禅僧を宗教者だけではなく、中国の最新の文化の仲介者としても高く評価していた。天野文雄監修の『禅からみた日本中世と文化』（2016年7月、ペリかん社）はこのテーマを扱っている最新研究の成果であるが、その研究を見れば、文芸、芸能などの中世文化に、どれだけ禅宗が影響を与えたかを再確認できる。しかも、中世の禅僧が僧侶でありながら、詩人、時には会計士、外交官等々という複数の顔を持っていたため、文化に限らず、政治や外交にまで貢献したと言える。

しかし、ここで「禅宗」の意味を考

える必要がある。様々な面で日本の社会に影響を与えた「禅宗」は要するに「色々なスキルを身に着けていた禅僧の団体」であったと言い換える事ができる。禅宗は中国との交流を活かして、宗教を遥かに超えた範囲で社会に広い意味での知識を発信した。だが、その中に、禅の本業とでも言える教え（禅の場合は教義という表現は使いにくい）の普及は案外少なかった。

例えば、足利忠義に禅の立場から仏教を分かりやすく説いている夢窓疎石の名作『夢中間答集』がある。禅に限らず、日本で作成された仏教書のなかでも傑作の一つであるが、当時の禅僧の活動を代表する作品であるとはとても言いがたい。在家に与えられた教導の例は皆無ではないとは言え、極めて少ない。しかも、やはり権勢者向けの説法である場合がほぼすべてである。つまり、禅宗の影響と禅の教えの普及を識別する必要がある。勿論、禅籍に説かれている禅の思想、悟りの観念などは、何の影響も与えなかったという訳ではない。中世の文化に禅がしみ込んだ事が、前掲の研究論集を始めに、先行の研究で分かる。しかし、それはあくまでも影響のレベルにとどまり、研究者の紹介と解釈がなければここに特徴のある教えが潜んでいるという事は大変気づきにくい。つまり、中世末期まで、禅宗は日本社会の中で多くの役割を果たしていたが、その宗派として一番重視されていた——少なくとも表に——教えは一握りの指導者向けの説法や文学作品の中で微かに観測できる影響を除けば、殆ど禅から発信されなかった。

近世に入ると、この状況が大きく変わって、それまでに殆ど無視されてい

た社会層が禅宗の視野に入った。しかも、経済力を持つ町人だけではなく、庶民にいたるまで、社会の全体と関わり始めた禅僧もいた。面白い例として盤珪永琢（ばんけいようたく（1622-1693））を見てみよう。日本中を歩き回り、説法を繰り返した盤珪は広く評判されていたが、遷化後忘れられつつあった。二十世紀に鈴木大拙が高く評価した事によって現在海外でも知られている禅僧の一人になった。彼の思想は独特で臨済宗を代表しているとはいえないが、禅の教えが社会へ発信された早い例として興味深い。盤珪が説いた禅は所謂「不生禅」である。一言でまとめてみると、生まれつきの仏性を備えているため、余計な苦勞をせずに、つまり悟りを求めずに、ありのままの自分がいいという教えである。その仏性は現生に生まれるずっと前からあることから「不生」という。禅の思想史には大変刺激的で興味深い観点だが、ここではこの思想をどういう風に人々に紹介されたかを考えたい。

彼の説法を記録した『盤珪禅師法語』のなかに、「不生禅」を説く盤珪本人の姿が見えるが、高名の禅僧に質問をしに来た人々も登場する。その質問から、当時の日本人を悩ませた不安を窺える。例えば、次の問いがある。

女人問、私事、人にすぐれて雷を恐れ、雷の声を聞くと、其まま気色悪敷煩ひ苦しむ。何とぞ此の恐ろしき事やむ様に御示し玉へ¹⁾。

盤珪の答えのすぐ後に、母親の痛ましい悩みも記されている。

女人問、私事子の死したる事悲

1) 藤本植重編集、『盤珪禅師法語集』、春秋社、1971、p. 219。

しく、同じ年ごろの子を見ても存出し、色々の事を思ひ、迷惑限りなし、お示玉へ²⁾。

ここでは悟りへの道や中国文化の紹介を求めず、人間なら誰しも抱えているような苦悩の解決をぶつけてくる聴衆が描かれている。では、この期待に対して、盤珪が何を答えたのか。まず、雷に怯えている女性に次の答えをする。

師曰、生まれたる時は、物に恐るる心なく、不生の仏心のみ也。(略) 雷は人のために世界へ雨をふらす物にて、人にあだをなす物にあらず。(略)³⁾

彼の思想を説きながら(生まれる前から備えている心に恐怖がない)、見事に安心をさせる答えといえる。そして、今でも慰めてあげたい後者の女性に次の答えをする。

師曰く、色々思ひ出すは、こなたの致す事也。本心には色々の迷ひ一点もなし。身どもが云ふ事を信用すれば、本来無事の人になる也⁴⁾。

筆者の個人的な印象に過ぎないが、冷たい返事に見える。だが、興味深い事に、この場合も一切妥協のない禅の教えに基づいている答えである。社会層、教育レベル、男女老若を問わず、盤珪は自分の禅を説いてたと窺える。子供を失って嘆いていた女性が「ワシ

の教えに従えば、本来悟っている自分の心に気づいて、悩む事を自分から止める事ができる」と言われた後に、どう思ったが気になる所である。つまり、盤珪の理解し易いとはとても言えない思想がどういう風に受け取られていたのだろう。それを探るための手がかりがある歌謡集にある。

四国伊予国大洲の如法寺で盤珪の説法を聞いた懶石という俳人が歌謡二十四首を詠んで、『麦春歌』と題した。それを見ると、説法の受け側の理解を窺う事ができるが、結論からいうと盤珪の思想の基本的なメッセージが通じたとと言える。例えば、次の歌がある。

仏なりたか仏なりやれ、生まれ付たるいき仏⁵⁾

又は

仏々と、あなかしましや、たれも生まれた、時仏

これだけでも分かるように、盤珪の思想が十分理解されていて、しかも広めやすい形でまとめられた。そして、その思想に基づいて、人々に受けやすい教訓的な形を時に取っていることも分かる。例えば、次の首がある。

金がほしくばほしいをのけて、むねの金仏たゝおがめ

又は

よくをへらせば浮世が浄土、人はのこらす皆仏

『法語』で見た盤珪の答えと同じく、大衆に恐らく難しかった思想的な面を捨てずに、感心を引くような方向に持っていく工夫が見える。

盤珪の名は日本に広く知られていた事が簡単に確認できるが、彼の思想は社会のどこまでに入り込んだのだろうか。それは日本禅の思想史の問題であって、文学とあまり関係のない事だと思われるかもしれないが、決してそうではない。ここでは一人の禅僧に絞ったが、当然ながら禅の教えを民衆に広めたのは彼一人ではない。近世は、禅の教えが寺院の境内から出て、徐々に社会に住み込み始めた時代でもある。近世の空気には、もうはや禅の文化だけではなく、禅の教えも漂っていた。思想史の観点から盤珪や近世の禅僧の新しい動きを研究する必要は当然あるが、しかし同時にその思想を人々がどう受け取ったのか、受け取ってどう使用したのかも、興味深いことである。言い換えれば、禅思想の教義的な面を理解するには仏教学の道具を使ってしっかり検討する必要があるが、近世の禅僧達が焚いた空薫を掴めるのは文学しかない。盤珪の場合は俳人への影響があったことが既に指摘されている⁶⁾が、近世禅僧、禅宗、禅思想が日本の人々になにをもたらしただのかを更に探る必要がある。筆者はそれを今後の課題にしたいと思っている。

2) 同上、p. 219-220。

3) 同上、p. 219。

4) 同上、p. 220。

5) 小野恭靖、『近世歌謡の諸相と環境』、笠間書院、1999、p. 365。

6) 例えば芭蕉の弟子、支考との交際をあげられる。実堀切、「盤珪禅師と支考 - 写本『白馬経』にみえる「芭蕉伝」「支考伝」について -」、『国文学研究』、39、1969、p. 64-70。

和紙を愛でる：古文書修復技術の融合

ーマレガプロジェクト・ワークショップー

湯上 良（国文学研究資料館特任助教）

2017年は、日本とバチカン市国が最初に外交関係を樹立してから75年目にあたる。その記念すべき年を迎えるにあたり、2016年10月5日、6日の二日間、バチカン図書館の図書館情報学学校、および同図書館修復部門でマレガ資料に関するワークショップ『バチカン図書館所蔵マレガ文書の保存と修復－技術の交流と創発－』が開催された。本稿では、古文書を通じた国際協力の一例として、この催しを紹介したいと思う。

2011年にバチカン図書館で発見された1万点以上に及ぶキリシタン禁制に関わる資料群を調査するため、2013年にマレガプロジェクトが発足した。この資料群は、日本国内外に存在する切支丹関係史料では最大級のもので、これまで年二回のペースで資料群のモノの管理を主体とした現地調査が行われてきた。この調査では、写真撮影、保存措置の判断、状態の記録を経て、修復士による保存・修復作業に入り、作業の後、資料のデジタル化を行う。このため、日本の修復の専門家からバチカン図書館の修復部門へと技術が伝えられた。

これまで、2014年11月に臼杵で、2015年9月にはバチカンでシンポジウムが行われた。今回のワークショップでは、これまでの資料の保存・修復活動を総括し、さらに日本の古文書の修復技術を幅広く普及する目的で開催された。

伝統との融合

このワークショップは、修復の専門家を対象とし、バチカン図書館や修復関連のメーリングリストなどを通じて事前に募集を行った。実習時に原文書を扱うことや、講師の数、会場の規模を考慮し、90人以上の応募者の中から経歴に基づいて、初日の講演会に40人、二日目の実習に16人を選考した。参加者は、スペインやドイツ、スコットランド、アメリカやイングランド、バチカンやマルタなど多国籍で、イタリアの参加者もローマや、近場のフィレンツェやルッカ、ペルージャだけでなく、北部は東からトリエステ、ヴェネツィア、ヴェローナ、プレーシャ、トリノ、南部はバリとポテンツァ、さらにシチリア島のシラクァザからも参加者が集った。

バチカン図書館と枢密文書館を管轄するブルーゲス尚書長、人間文化研究機構の佐藤理事による主催者挨拶に続き、中村バチカン大使のご挨拶を賜り、臼杵市の中野市長も列席した。

プロジェクトリーダーである国文学研究資料館の友友一雄氏による開催概要の説明から講演の部が開始された。

まず、ワークショップで発表された内容を元に、資料の保存・修復事情を紹介する（出典元となった各発表者を（ ）内に記載する。次第は、次のURL参照：

<https://www.nijl.ac.jp/pages/research/marega06.html>）。

19世紀末のバチカン図書館長フランツ・エールレ神父は、手稿本修復部門を創設し、延命するための「修理」から近代的な保存・修復への転換を図り、模範的な取り組みを主導した。

また、50年前に発生したフィレンツェ大洪水は、日本で西洋の保存・修復技術を受容するにあたり、大きな転機となった。1966年11月4日、イタリア全土で降り続いた大雨によるアルノ川の氾濫によって、フィレンツェでは甚大な被害が発生し、多数の資料が被害を受けた。被災資料の保存・修復だけでなく、予防的保存などの考え方が発展した。日本でも蔵などに収蔵されていた古文書の保存環境を念頭に、新たな保存のあり方への見直しが行われた。また、和紙を主体とする伝統的な修復技術との融合や発展が見られた。その後、一層の近代化を進め、海外との交流の中で新たな創造と発信が行われている（青木・金山発表）。

こうした経験は、東日本大震災を始め、被災資料への対応にも活かされた。日本の資料の救出体制は、ある程度整備されているが、基本的には、少数の専門家と多くのボランティアの支援による救出作業が行われる。したがって、現地で比較的調達しやすい物資を用いた「レスキュー修復」が行えるよう、創意工夫がなされた（高科発表）。

イタリアでもフィレンツェ大洪水後、事前対策の重要性が認知され、近年は、公的機関が共同で緊急時のガイドラインや計画書を作成している。救出すべき資料の優先順位や避難経路を事前に定め、緊急時を想定した予行演習も実施する。被災後も資料の洗浄や乾燥のため、真空包装や真空凍結乾燥などを最大限に活用している（シドーティ発表）。

次に、伝統的な和紙に関する日本とバチカンの技術の融合について見ていこう。日本の製紙技術は、西洋よりも長い歴史をもつ。和紙の製造工程では、楮をさまざまな過程を経て加工する。さらに、紙漉きの工程時間も長く、諸外国の紙と比較すると二倍から十倍以上の時間をかけて制作し、丈夫な和紙が漉き上がる。また、伝統的に寸法も種類ごとに定められている（増田発表）。

また、身分や格式に応じて、多種の形態や折り方・包み



講演の様子

方を用いた。例えば、外側の漉きムラを切り落とした堅紙は重要な公文書に、それを横半分に切った横切紙は、日常の書簡や事務書類に用いたが、村から藩に提出する書類には、階層差を反映し、縦に切った堅切紙が使われた。印鑑や付箋、文章の上から内容を補足する掛紙も貼られ、修復作業時の取り扱いにも注意を要する（太田発表）。

マレガ文書の調査では、資料の写真撮影や保存措置の判断を行い、状態の記録を経て、保存・修復作業に入り、資料のデジタル化を行う。そのため、日本で通常行われる修復作業は行わず、デジタル化を踏まえた必要最小限の措置を行う。修復作業の初期段階では、西洋式の措置を行うこともあった。ところが作業を進めていく内に和紙の特性に対応できないことがわかり、日本側から伝授された方法に立ち戻った。これこそが日本とバチカンの間で行われた「技術の交流と創発」であったと言えよう（ヌーニェス＝ガイタン・修復ラボメンバー・金山発表）。

なお、講演の部はバチカン図書館東洋部門のデリオ・ヴァニア・プロヴェルビオ博士の総合司会で行われ、日本語やイタリア語、英語が飛び交う中、ローマ大学のマルコ・デル・ペーネ教授や、ローマ在住の清水里香氏による通訳によって円滑に進行された。

日本とバチカンから世界へ

ワークショップ二日目は、金山氏が清水氏の通訳を介し、各種の実演を行った後、班に分かれ、実際のマレガ文書を用いてバチカンと日本の修復士の指導の下、実技を行った。各班の通訳として、ローマ在住の阿部愛氏、阿部美寿穂氏の協力も仰いだ。参加者は、実際に日本の古文書に触れ、作業を行ったが、バチカン枢密文書館やバチカン美術館を始めとしたイタリアの各機関、国立ノルウェー図書館やグラスゴー大学など、経験豊富な修復士も数多く、和紙自体の扱いには美術品などで慣れ親しんでいるメンバーであった。

実演は、文書の部分修復から始められた。日本の古文書は、細く幾重にも折りたたまれていることが多く、年月が経つと固着して開かない場合がある。イタリアではあまり用いないレーヨンペーパーを使って、文書の展開の仕方についても実演が行われた。さらに傷んだ文書を補強する裏打ちや、紙縫りの作成も行われた。

昼休み後には、元興寺文化財研究所で行われている修復作業の様相をまとめたビデオも上映された。

参加者たちは、熱心にメモを取るだけでなく、カメラを片手に録画や撮影をしながら技術習得に熱心で、修復用具へのこだわりも見られた。

実際に手を動かして作業を行ったこともあり、会場は、とても熱気に溢れていた。また、これまでも海外で文化財修復について講演や伝承をしてきた増田氏にかつて教わったことのあるという受講生や、その孫弟子などもおり、独特の一体感も醸成された。最後は、受講者からの万雷の拍

手の下、講師陣が手を取り合いながら、一人ずつ前に出るという、まるでオペラのエンディングのようになり、大変な盛り上がりを見せた。

翌日、ピアッツォーニ副館長も「修復室からの拍手が図書館中に響き、まるでローマ対東京のサッカーの試合が行われていたかのようだった」と語っておられた。



実技の様子

ワークショップの意義

現在、バチカン図書館修復部門の常勤の修復士は10人ほどおり、その内4人が他の文書の修復には携わず、専従でマレガ文書の修復に当たっている。今回のワークショップでは、技術を伝承した日本側と、マレガ文書の修復に取り組んでいるバチカン図書館の修復部門が共同して、欧米の修復士たちへ新たに日本の近世文書の修復技術を伝えることに成功した。バチカン図書館が日本の古文書修復における一大センターとして認知されただけでなく、後日、バチカン副館長が執筆したように、「機関の枠内に留まらず、日本国とバチカン市国の間で役割を補い合い、両国全体を念頭に置いたプロジェクト」（2016年10月16日（日）L'Osservatore Romano 紙、第5面）の成果が表されたと言えよう。

修復部門の面々は、発表者としてだけでなく、オーガナイザーとして、まさに七面六臂の活躍であった。日本側の発表者たちは、外国での発表を円滑に進めるため、準備研究会やプレゼンの実演を国内で複数回開催し、相互にレビューを行い、発表を磨き上げた。実際に参加者からも、ワークショップの第二弾や講演録の出版を期待する声が寄せられている。

また、翻訳者の戸田氏、カンパニョーロ氏、原田氏、日本語と英語が併記されたプレゼン資料の準備作業を行った筒井氏や淵田氏、予稿集の準備を行った三野氏や高橋氏、当館事務方の各係との連携の賜物であることを付け加えておきたい。京都外国語大学のヴィータ氏には、バチカン側との折衝で多大なるご支援をいただいた。関係各位のご尽力にこの場をお借りして、心から感謝申し上げます。

第9回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2016年で第9回を迎えます。

受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満の研究者です(3名以内)。

選考委員会は、関連諸学会から選出された委員(うち、日本近代文学会からは選出者なし)ならびに国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長と国文学研究資料館教員1名の7名で組織されています(下記「選考委員」参照)。

第9回日本古典文学学術賞は、2015年1月から12月までに公表された日本古典文学に関する論文または著書(明治初期を含む)を対象業績として、選考委員及び過去の受賞者(日本古典文学会賞受賞者を含む)から推薦された対象者の業績について、選考委員会が厳正かつ慎重な審議を重ねました。選考の経緯は次の通りです。

○5月31日(木) 互選により委員長を選出。候補者7名の資格と業績を確認。

○7月 5日(木) 候補者を4名に絞り、審議を継続。

○8月 2日(木) 受賞者を木下華子氏、牧藍子氏及び小財陽平氏の3名に決定。

授賞式は10月21日(金)にパレスホテル立川(立川市曙町)で開催され、選考委員会の内田保廣委員長による選考経緯の報告、寺島恒世委員による木下氏の選考講評、入口敦志選考委員による牧氏の選考講評及び堀川貴司委員による小財氏の選考講評がありました。引き続き同ホテルで記念パーティーが催され、受賞者を囲んで歓談しました。

◆選考委員◆

内田 保廣 (日本近世文学会／共立女子大学教授)

堀川 貴司 (中世文学会／慶應義塾大学教授)、

田淵 旬美子 (和歌文学会／早稲田大学教授)、

室城 秀之 (中古文学会／白百合女子大学教授)、

藏中 しのぶ (上代文学会／大東文化大学教授)、

寺島 恒世 (国文学研究資料館賛助会運営委員会
委員長／同館副館長)、

入口 敦志 (国文学研究資料館准教授)



左から 入口委員、藏中委員、谷川副館長、寺島委員、小財氏、木下氏、牧氏、内田委員長、室城委員、堀川委員

第9回日本古典文学学術賞選考講評

日本古典文学学術賞選考委員会

木下華子氏の『鴨長明研究－表現の基層へー』(勉誠出版、2015年3月刊、A5版404頁、本体8,750円)は、『方丈記』・『発心集』等の散文を綴る一方、歌人として和歌を詠み、歌論書『無名抄』を書くなど、ジャンルの枠を越える鴨長明の表現の営みにつき、各作の詳細な分析と考察をもとに、その内実を追究した総合的研究である。

全体は四部に分かれ、歌論書『無名抄』を取り上げる第一部、和歌作品を論じる第二部、『方丈記』の作品研究としての第三部、そして、長明の営為や思想を文学史の中で展望する第四部という構成を取る。

第一・二部は、長明研究において『方丈記』・『発心集』等の散文に比しては先行論が乏しい歌論や和歌を取り上げ、解明を試みたものである。歌論書『無名抄』については、韻文・散文の両性質を併せ持つ歌論的随筆として、書き手の自己意識や和歌観を析出し、その執筆動機を推測するとともに、徹した本文研究を行い、諸本系統と成立及び最善本の古態性を確認した(第一部)。和歌については、個々の歌の表現に込められた意図や企みを読み

解く姿勢から、歌人始発期の場の役割、寄人登用の契機となる百首の狙い、代表歌の意味と位置付け等を明らかにして、歌人長明の営みを格段に鮮明化した(第二部)。

第三部は、研究の累積が膨大な『方丈記』につき、諸本と構成、災厄の叙述、自身の語り方、終章の方法、成立の場と享受等の問題を取り上げ、精力的な検討を試みた。各説ともに周到な腑分けに基づく考察を重ね、書き手の意識的な叙述方法を導いた上で、諸説並立する難解な終章の読解から、「告白の文学」ではなく読み手に開かれた作であることを享受者層や成立の場と併せて推定した。

第四部では、『発心集』と「数寄」を扱いつつ、長明の営みを文学史の中で問い直したもので、「数寄」の実相を実地見聞志向との相関のうちに解き明かし、長明の考察にはジャンルを越えた検証の必要性を説いている。

各部各論ともに的確に研究史を踏まえて課題を見極め、作品の狙いを犀利に解説する一貫した姿勢を貫きながら、表現主体の自己意識と対読者意識を浮き彫りにし、長明の著述の全貌を解き明かすことに成功した研究書として高く評価される。とりわけ、全貌の俯瞰から、例えば散文において本歌取り等の韻文の方法が用いられる等、ジャンル横断的な作者、長明ならではの叙述を析出したことは特筆に値する。長明の書く営みに、したたかな戦略のもと「自らの物語化」を果たす狙いを見定める理解は、説得力を有する卓抜な新見に違いない。

残された課題は、『発心集』に作品研究として立ち向かい、その成果を以て上述の結論を問い直すこと、及び表現者長明の表現への目論見と出家敢行の意思・経緯とはいかに関わっているのか、戦略的な「自己語り」の営みが、具体的に日本文学史に何をもちたらし、何を切り拓いたのか、等の省察に向かうことであろう。本書が提示する斬新な読みを、可能性から必然性へと高めるべく、引き続き周到な分析に基づく鋭利な考察が期待される。

豊かな才知と資質に富む将来性を高く評価し、選考委員会は全員一致で、木下華子氏を第9回日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。
(文責 寺島 恒世)

牧藍子氏『元禄江戸俳壇の研究—蕉風と元禄諸派の俳諧—』(ぺりかん社、2015年2月刊、A5版288頁、本体6000円)

とかく蕉風の研究に偏りがちな元禄期の俳諧について、蕉風以外の俳諧師たちに焦点をあて、その多面性を明らかにしている。また、そのことを俳壇の動向などの外形的なものだけからではなく、実作品の丁寧な読解によって考察していることが高く評価できる。著者自身がいう「元禄期の江戸俳壇を立体的にとらえ、具体的な事例とともにその実態を提示する」という目的は十分に達成されているだろう。

全体は三章からなる。第一章で其角の俳風の変遷を押さえ、第二章で初期俳諧から元禄俳諧への展開を追い、第三章では元禄期江戸における前句付を丁寧に読解しながら、享保期の不角の活動に至るまでを扱う。このように元禄を中心にしながらも、その前後の時代を射程に入れて俯瞰する構成を取っているため、元禄期の特徴がより浮き立つように展望できるのは、大きな特徴であろう。

連句実例の丹念な読み、当時の俳論から抽出した理論、興行の具体像の提示、文壇の動向というように、多方面からの考察を駆使して元禄期俳諧の諸相を明らかにしていく方法は、まさに「立体的」というにふさわしく、そのことによって説得力も増していると思われる。また、それらの考察の背景には文学史的な位置づけをするという態度が通底しており、単なる事象の説明には終わっていない。したがって、元禄をはさんだ前と後の時代との連続性や断絶を明らかにし、元禄期の特徴がより鮮明になっているといえる。この点も評価すべきであろう。

蕉門では異質とされる其角を採りあげ、談林の方法や沾徳の俳論との類似性を見いだしているが、そのことによって、蕉門の陰で見えにくくなっていた、元禄以前と以後との連続性を明らかにする。また、松春という元禄の「大衆作者」の句や俳論を読み解き、元禄風の実像を提示する。第三章では特に調和の前句付について、これも丁寧な作品の読みに基づき、調和における俳諧と前句付との位置づけをおこなうという新たな視点を見だし

ている。不角の月次興行の分析から、元禄期から享保期への連続性を指摘することも、前述した文学史的な視点からのものであろう。

ただ、例えば「ぬけ」について、第二章第一節では「談林のありようを如実に反映した、極めて談林的な手法」とする一方、第一章第三節では「俳諧に本質的に根ざすものとして生き続けている」とするような矛盾も見られる。欲を言えば、蕉門の俳諧を含めた元禄期俳諧の全体像についての記述があればと思われるが、これはむしろ今後の著者の研究活動に期待すべき点であろう。

本書は、元禄期俳諧に新たな視点を提示する点において高く評価できる。また、その結論を達成するために用いている方法も、前述したように多角的で丁寧なものであり、研究書としての完成度は高い。よって、選考委員会は全会一致で受賞するにふさわしいと決定した。
(文責 入口 敦志)

小財陽平氏の『菅茶山とその時代』(新典社、2015年11月刊、A5判495頁、本体14,200円)は、江戸時代中後期漢詩壇における重要人物、菅茶山(1748～1827)の作品の読解を中心に、この時代の漢詩と俳諧、あるいは漢詩と絵画の関わりなどを探った研究である。

全体は三部に分かれる。それぞれ主な論文を取り上げて紹介論評する。

第一部「菅茶山研究」は本書の中核である。近年「菅茶山関係資料」という名称で重要文化財に指定された、広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫所蔵の『黄葉夕陽村舎詩』前編の草稿本を詳細に調査することにより、いくつかの重要な指摘を行った。第一に、天明年間、菅茶山は政治や社会に対する強い批判的態度を詩のかたちで表明していたが、版本として出版される際、編纂校訂を任された頼山陽によって削除また醜化されていることである。平明で穏やかな詩風を持つ田園詩人というイメージの茶山の隠された一面を明らかにした功績は大きい。さらに、このような批判的態度が、西山拙斎・頼春水など、同じ中国地方の学者で、寛政異学の禁の陰の主役となった人々と共有されていたことを『休否録』の読解によって提示した。政治上の転換と学問上のそれとが軌を一にしていたというスケールの大きな指摘である。第二に、編者頼山陽の編集過程を掘り下げることにより、六如への対抗意識、作者茶山との葛藤などを明らかにした。丁寧な読解によって、六如・茶山の次世代を担う山陽が彼らとどのように相見えたかを、ドラマティックに描き出すことに成功している。

第二部「和漢比較研究」においては、蕉風復興運動を先導した俳諧作者として知られる三宅嘯山の漢詩作品や俳諧評論を通じて、『唐詩選』その他の漢詩受容の様相を探る。また、雪や蝶々、また李白の著名な詩の題である「月下独酌」など、和漢双方において長い伝統のある題材を、当時の漢詩人がいかに詠んだか、そこに先人の表現を乗り越えようとする苦心があり、俳諧的な表現を取り込むことも厭わない態度が見て取れることを指摘する。

第三部「文人趣味」においては、柴野栗山を中心に近世文人の愛石趣味を論じて、プライベートな場面における玩物喪志と、パブリックな立場としての朱子学的規範意識の同居、という問題を指摘する。また、菅茶山その他の画賛詩を取り上げて、絵画と相補って、その画面の時間空間の外側へと見る者を誘い出す、画賛の効用を明らかにする。池澤一郎氏などの研究に学びつつ、絵画における画賛の役割を明確に論じ、示唆に富むものである。

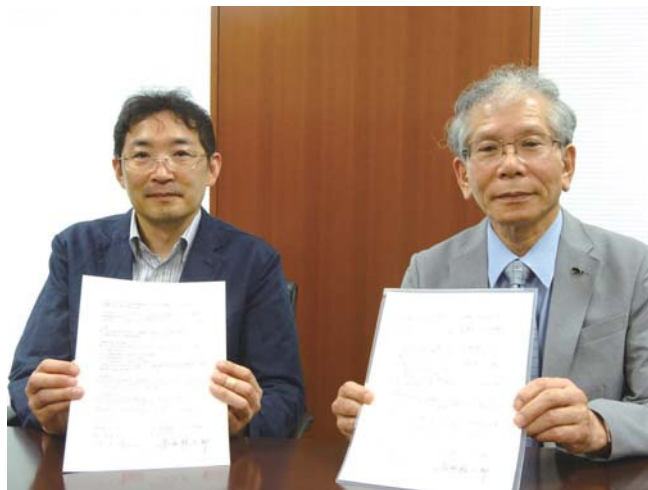
選考委員会においては、タイトルに「その時代」とあるが、時代を描く部分が物足りない、作品の読解だけでなく周辺資料による傍証が欲しい、版本については出版関係資料への言及も必要である、などの注文も出た。いずれも、この研究成果をさらに発展させ、幅広く、また深く進めていくための道標となるものであろう。特に第一部に関しては、草稿本の書誌学的研究や、書簡など作品以外の自筆資料への目配りなども視野に入れつつ、さらなる大成を目指していただきたい。

その確固たる基礎として、本書の成果を高く評価し、選考委員会は全員一致で、小財陽平氏を第9回日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。
(文責 堀川 貴司)

協定等の締結について

国文学研究資料館は相互の連携・協力を推進するため次のとおり、協定を結びました。

- 6月 1日 国文学及び極域科学の文理融合の学際的研究を発展させることを目的として、国立極地研究所と連携・協力に関する協定書を締結。
- 8月 2日 古典籍に関わる学術研究を振興し、その成果を社会に還元することを目的として、日本近世文学会と連携・協力の推進に関する覚書を締結。
- 9月 9日 国文研が統括する人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」に関わる学術情報の相互協力のため、大分県臼杵市と協定書を締結。
- 9月30日 デジタルアーカイブシステムの構築・発展を進めること、及び教育・研究活動支援により広く国民の文化的活動に寄与することを目的として、国立国会図書館と連携・協力に関する協定書を締結。
- 10月14日 相互の研究等の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資することを目的として、ベルリン国立図書館と学術交流・協力に関する基本協定書を締結。



日本近世文学会との調印式
左：鈴木健一 日本近世文学会 代表、右 今西祐一郎 国文学研究資料館 館長



臼杵市調印式
左：中野五郎 臼杵市 市長、右 今西祐一郎 国文学研究資料館 館長

人命環境アーカイブズの地平 —福島県双葉町における保全活動と地域持続—

福島第一原子力発電所事故発生から6年近くの月日が経つが、いまだ周辺地域は何ら復旧も復興もしていない。国家権力は放射能被害を食い止められず、しかし、一部地域では住民の帰還を(強制的に)進めている。このような状況にあって、地域の持続という問題に対し、アーカイブズ学は何を行なうことができるか、現実的課題の検討をひとつの柱として、2016年度より人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」において「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」(研究代表者・渡辺浩一当館教授。以下、本研究と略す)をスタートさせた。

本研究の前提として、筆者は東日本大震災以降、茨城・福島・栃木県内の被災歴史資料を救出した茨城史料ネットや、白井哲哉氏(筑波大学教授)が福島県双葉町で積極的に進めた筑波大学復興・再生支援プログラム「東日本大震災の記憶・記録の共有・継承による地域コミュニティ再生のための情報基盤の構築」(<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/futaba-archives/>)に協力をした。その場で得た研究視角によって、地域持続という現実的問題、帰還困難区域におけるアーカイブズの構築を課題として目指したのが本研究の一端である。

双葉町は白井哲哉氏とともに「双葉町震災アーカイブプロジェクト」を展開している。本研究においても双葉町の再生と地域持続のために今年度は3つの保全に関わったので、本稿ではこれらを紹介したい。なお、いずれも数年前から継続的に行なわれているものであるが、本稿では紙幅の都合上今年度に関わるもののみを記す。

①一時避難場所である「ヘルスケアふたば」での現状記録調査。「ヘルスケアふたば」とは双葉町の福祉施設で、東日本大震災の避難場所となったものの、福島第一原子力発電所事故によって、ここからも退避しなくてはならなくなった。2016年9月17日に双葉町担当者や白井氏らをはじめとして、宮間純一当館准教授・武子裕美当館事務補佐員とともに、退避時の状況がそのまま遺されている「ヘルスケアふたば」を訪れ、現状の記録化を行った。避難のために訪れた名簿、炊き出し直後の食器、刻一刻と変化する原発の状況を記したホワイトボードなど、避難場所の状況が生々しく遺されていた。

②町内民間所在資料のクリーニングと整理・調査。町内からレスキューされた民間所在資料は放射線量を計測し、国が定めた13,000cpm(count per minute. 1分間あたりの放射線計測数)より1/20以下の値の資料のみを町外に持ち出して、クリーニングと整理作業を行っている。相馬藩在郷給人の家の資料もあり、これらは今後の近世領主制研究に資することが大きいであろう。但し、シバンムシが大量に発生して、劣化が進んでおり、駆除と対策が武子氏によって進められている。



シバンムシ除去と防虫作業

③町内民間所在資料のレスキュー。2016年8月20日、双葉町担当者・白井氏・地域住民らとともに双葉町両竹地区個人宅の資料レスキューを行った。蔵の中はかなり破損しており、筆者も蔵出し作業中に床が抜けたため木材が足に落下し、左足小指の爪を負傷した。安全靴を履いていなかったらどのような怪我を負ったか、いまでも恐ろしく感じる。タバコ10箱ほどとなった当該資料は近代に村長を務めた際の日記などが発見され、両竹地区の政治・行政を検討する上で重要な資料になることであろう。

双葉町をはじめとする福島県浜通りにおいてアーカイブズ学が何を成し得るか、その研究ははじまったばかりであり、人類史上未曾有の重大事故に対して、あまりにも課題は大きい。しかし、歴史と文化の継承が地域持続に資することは疑いなく、本研究の課題が目指すところは、すなわち、アーカイブズ学から立ち上げる福島県浜通りの復興計画である。



福島第一原子力発電所

〔付記〕本稿は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」(研究代表者・渡辺浩一当館教授)における成果の一部である。(西村 慎太郎)

平成28年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

平成28年11月3日(木・祝日)、東京都千代田区のイイノホールにおいて、国文学研究資料館主催の「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、日本の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、文献上確認できる最古の日付が寛弘5年(1008)11月1日とあることから(『紫式部日記』より)、平成24年に11月1日に定められたものです。当館でも古典に親しむというその趣旨に賛同し、4年前より記念の講演会を催してきました。

今年度より11月1日近接の休日開催となり、文化の日ということもあって、400名を超える聴衆で会場は埋め尽くされ、熱気に満ちた講演会となりました。講師は、当館の今西祐一郎館長と当館准教授の小山順子氏でした。寺島恒世副館長の挨拶にはじまり、まずは小山氏より「虚構の和歌—題詠の魅力—」という題でお話がありました。一般的に歌人の実人生から生み出された「実詠」の歌が評価されがちですが、小山氏は事前に設定された題によって和歌を詠む「題詠」の方法や面白さについて丁寧に解説していきます。百人一首の和歌を取り上げ、現代文化などの身近で具体的な例をからめた読み解きに、会場は終始笑いに包まれ、虚構の和歌の世界に魅了されていました。次いで、今西館長より「『源氏物語』の「冷泉帝」とは誰か?」という題で講演がありました。天皇の子でない人物が即位するという物語はなぜ生まれたのか。『源氏物語』における最大の謎のひとつについて、『伊勢物語』の「後人注記」を端緒として鮮やかに解き明かしました。不義の子冷泉帝の物語が、現実の二つの皇統の相克から生じた「陽成帝、業平の子」とする文徳皇統否定の風説に支えられたとする見解には、会場の皆様も大いに納得されたようでした。いずれも古典の魅力や奥深さをわかりやすくお話ししたもので、しばらくはその余韻に浸りながら、今年度も盛況のうちに閉会しました。

なお、平成29年度の「古典の日」講演会は11月3日(金・祝日)に開催し、当館展示室でも「古典の日」にあわせて鉄心斎文庫コレクションの伊勢物語の特別展示をおこなう予定です。今後もより多くの方々に魅力あふれる古典世界にご招待したいと考えています。

(恋田 知子)



会場の様子



今西館長、小山准教授

大学共同利用機関シンポジウム2016

「研究者に会いに行こう! —大学共同利用機関博覧会—」参加記

大学共同利用機関シンポジウム2016「研究者に会いに行こう!」が、11月27日(日)にアキバ・スクエア(秋葉原 UDX 2F)で開催されました。本年度7度目となる大学共同利用機関主催の大型イベントで、日本を代表する研究機構・機関による24本の研究者トークは4時間におよび、トークステージを取り囲む各機関のブースでは最新の研究成果や活動内容の紹介が多彩に展開され、会場は熱気に包まれていました。本年は、昨年を上回る732名の来場者で大いに賑わいました。

当館からは、宮間純一准教授が「過去・今・未来をつなぐアーカイブズ」と題した研究者トークをおこない、研究部教員2名と管理部スタッフ3名の計5名が体験展示ブースにて来場者への説明と交流にあたりました。ブースを訪れた方々は、パネル展示したバチカン図書館所蔵文書の整理や被災資料レスキューの画像に見入り、歴史的典籍NW事業の成果報告や古典籍のくずし字読解に関する共同研究の進捗説明を興味深く聞き入っておられました。

手にとって閲覧できるようテーブルに並べた江戸時代の和本は、敢えて虫損の酷いものを持ち込み、資料の補修・管理がいかに大切かを知っていただくよい切っ掛けとなりました。資料の1点には、偶然、銀杏の葉が挟まっており、向かい合わせの丁には虫の死骸という、説明に打ってつけのもので、来場者の多くから「虫喰い、すごいですね!初めて見ました。」「写真撮影してもよいですか?」の声が寄せられたのも嬉しいことでした。資料を提供してくださった当館・青木陸准教授によると、銀杏の防虫効果は葉が青いときだけで、挟まっている虫は紙魚(ヤマトシミ)とのことでした。

時代を超えて伝わるもの—資料・情報・知識・文化、また、それらを伝えていく努力の重要性を実感した1日でした。

(青田 寿美)



第40回国際日本文学研究集会

平成28年11月19日(土)～11月20日(日)、第40回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催され、国内外からおおよそ100名の参加者が集まりました。

二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された8名の研究発表、5名のショートセッション発表、7名のポスターセッション発表の、計20名による発表がなされました。発表者はさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。二日目の午後には、国際日本文学研究集会の四十周年記念イベントとして、第4回と第12回の集会で発表されたKRISTEVA Tzvetana氏(現在日本・国際基督教大学教授)と兪玉姫氏(現在韓国・啓明大学校教授)の両先生による特別講演が行われました。個性豊かな御講演は会場の聴衆の心を動かし、40回記念大会に相応しいものになりました。



研究発表

国際日本文学研究集会は、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和52年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。今年は四十周年という記念すべき大会で、特別講演のほか、第1回から第39回までの発表者、講演者総計524名の方々のリストを掲示し、四十年間の歩みを顧みしました。また、今年から、研究集会の様子はインターネットを通じてライブ配信するようになり、会場まで来られない方でも会議の様子を視聴できるようになりました。会議プログラム及び要旨集(日本語・英語)のPDF版は、国文学研究資料館のwebにて公開されておりますので、御覧いただければ幸いです(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2016/japanese_literature.html)。研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は3月に国文学研究資料館より出版される予定です。

なお、第41回国際日本文学研究集会は平成29年11月に開催される予定です。若手の研究者や外国人研究者がより参加しやすくするために、昨年より、研究発表・ショートセッションおよびポスターセッションの三つのセッションはすべて英語による発表を可能としました。国内外の若手研究者の多数のご参加をお待ちしております。平成29年4月下旬から発表者を募集しますので、詳細については当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。(陳 捷)

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成28年度入試説明会を開催

平成28年10月15日(土)に、平成29年度入学希望者を対象とした入試説明会を開催し、4名の参加がありました。

当日は館内の施設見学や入口敦志准教授による特別講義も開催され、参加者からは「充実した内容で大変良かった」との感想が寄せられました。



講義を行う入口准教授



学位記授与式。左から 山下専攻長、今西館長、糸さん、小林教授

○平成28年度秋季学位記授与式

平成28年9月28日(水)に、平成28年度秋季学位記授与式が葉山キャンパスにて執り行われ、当専攻の糸汐里さんに学位が授与されました。

○修了生が平成27年度(第21回)長倉研究奨励賞を受賞

平成27年度修了の黄昱さんが、総研大の第21回長倉研究奨励賞を受賞しました。長倉研究奨励賞は初代学長長倉三郎氏の寄附金をもとに同氏の意志に基づき、総研大の学生が行っている研究のうち特に優秀な研究を奨励するために設けられたもので、当専攻修了生の受賞は黄さんが初となります。



長倉研究奨励賞を受賞した黄昱さん

調査収集事業の見直しについて（ご報告）

日本全国各地に散在する国文学に関連する資料を調査し、その画像をマイクロフィルムで収集する事業は、創設以来の国文学研究資料館の基幹事業として、延べ数千人に及ぶ国文学文献資料調査員の方々の協力を得て、この40年間に調査は1000を超える図書館、文庫、寺社に及び、マイクロフィルムに収めた点数は40万点を超えるという実績を達成しました。

さて、私ども大学共同利用機関法人においては、国立大学法人と同様、法人の発足とともに、6年ごとの中期計画・中期目標の設定とその実行が厳しく求められています。折しも館では、平成26年度から、30万点の日本古典籍の画像データベース作製を基盤とする人文学分野唯一の学術の大型フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」がスタートし、調査収集事業と類似するものの書誌調査を伴わない古典籍画像情報の作成を行っているところです。

このような現状に対し、従来の調査収集と画像情報作成との一本化を軸に、両活動の有機的な統合を図る必要が急務となりました。この課題に対して、研究戦略室で検討し、その提言を承けて、以下のような指示を館長名で出しました。

1. これまでに調査及び収集してきた資料についての検証（総括）
2. 従来の調査収集事業について調査員制度等の見直しを行い、「新たな調査収集」のビジョンを策定し、実施すること
3. 調査収集事業部と情報資料サービス事業部の統合
4. 調査・収集と連動した共同研究の実施
5. 情報事業センターと古典籍共同研究事業センターとの協議組織の設置

この5項目のうち、特に1、2、4（及び3）が、新しい調査・収集のあり方と関わるものです。そして、これらについて検討するにあたり、次のような諸点に配慮しました。

- ・平成26年度からスタートした「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（大型プロジェクト）が画像情報作成を優先的に実施していることを踏まえた書誌調査の意義づけ。
- ・今後必至となる事業予算減少への対応。
- ・過去の調査・収集成果の分析とそれを踏まえた中長期的な調査・収集計画の策定。

今後の調査収集の方針としては、

- ・調査・収集を研究と関連づけた調査・収集という新たな位置づけにより継続する。
- ・それとともに、研究者の力を資料の調査のみではなく収集した資料の分析と研究にあてるよう改める。これは将来的に共同研究の形で行い、その中に収集資料の解題も含める予定である。
- ・目録がない箇所など一定の基準にあてはまる箇所について調査を行うこととし、調査箇所を削減する（目録の備わる箇所は、収集の前に丁数・状態・間紙の要否など収集のための必要最小限の原本確認を国文学研究資料館の教員・研究員等が行い、書誌調査は行わない）。
- ・平成29年度については新しい調査収集体制への移行期と位置づけ、原則として調査を休止する。
- ・収集については、現在の収集箇所は当面継続する。

ということにしました。

また、今後の調査収集の体制は、情報事業センターを構成する四つの事業部のうち、平成29年度から調査収集事業部と情報資料サービス事業部を統合、学術資料事業部とし、その下に、「資料分析専門部会」と「地域資料専門部会」という館内教員と学識経験者で組織される二つの専門部会を設置して、委員を委嘱する予定です。

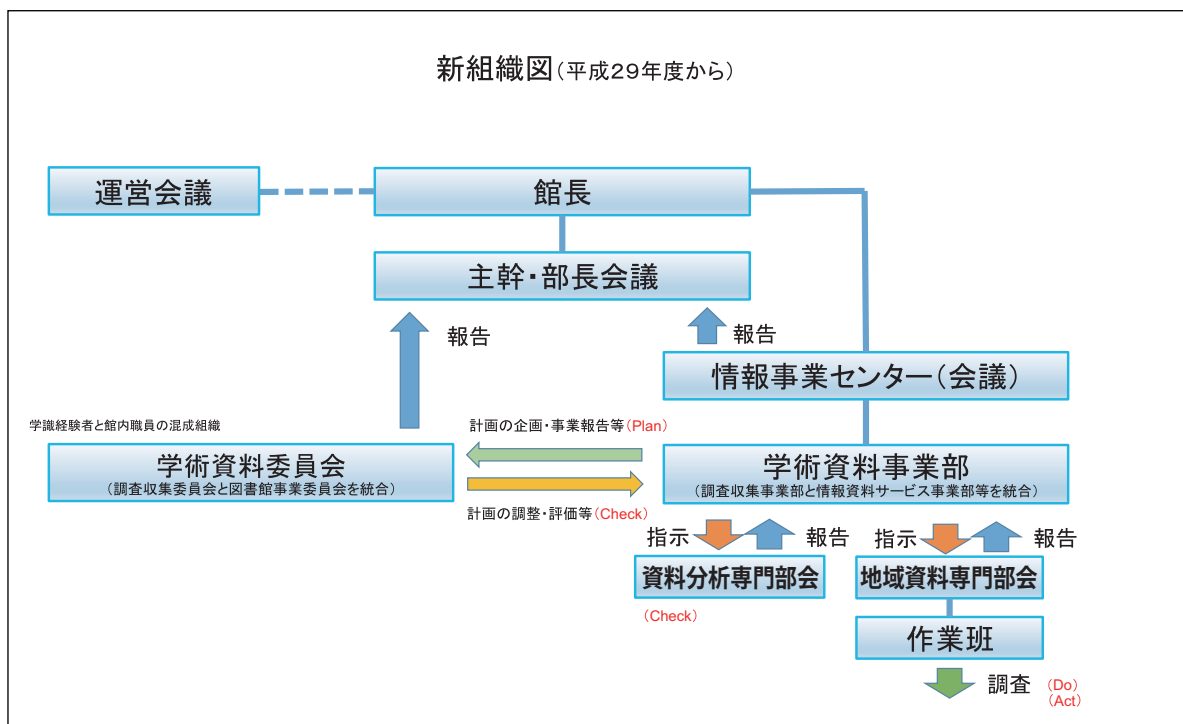
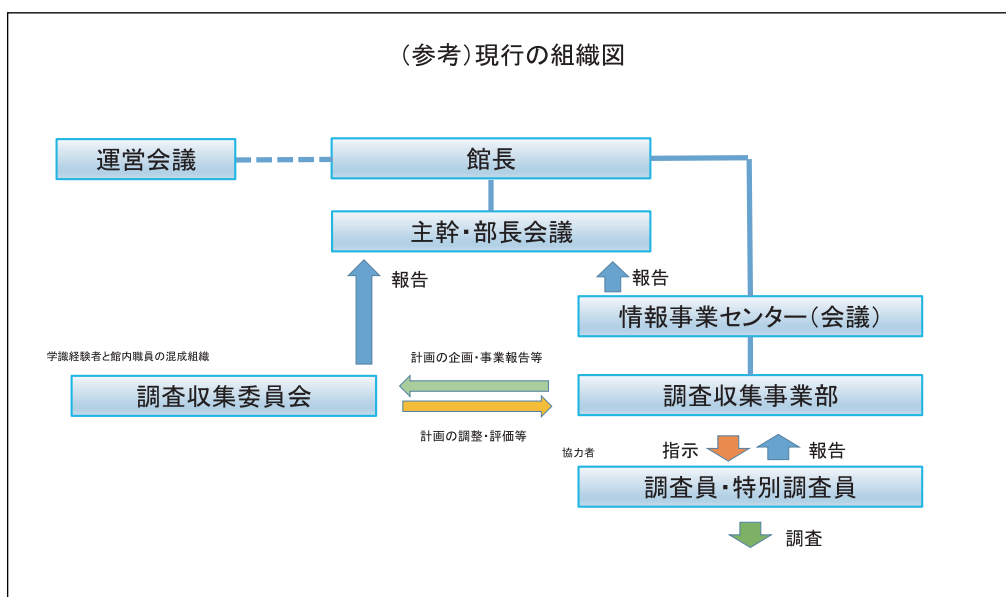
資料分析専門部会が過去の調査収集成果の分析と今後の調査収集方針の提案、地域資料専門部会が各所蔵先における資料調査を担当し、地域資料専門部会の委員にはこれまでの調査とほぼ同様に調査カードへの書誌情報採録等を行っていただきます。

この新体制の発足に伴い、平成28年度末をもって国文学文献資料調査員制度は廃止しますが、長年にわたってご協力い

ただいた歴代の調査員の方々に心より御礼申し上げます。

なお、近代文献については、科研を申請し、法人第三期の間は科研費で調査を継続します。

今後、さらなる状況の推移により、上記見直し案の手直しが必要となる可能性もありますが、まずは現時点での状況をご報告いたします。(館長 今西 祐一郎)



2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

4月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24	25	26	27	28	29

- 開館 :9:30～18:00
 - 請求受付 :9:30～12:00,13:00～17:00
 - 複写受付 :9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 :9:30～17:00
 - 請求受付 :9:30～12:00,13:00～16:00
 - 複写受付 :9:30～15:00

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。ぜひご利用ください。

◆お申込みはEメールでの受け付けです。

詳細は当館WEBページをご覧ください。

<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>



表紙絵資料紹介

ふすはなにれんが 賦花何連歌 (天正九年五月六日)

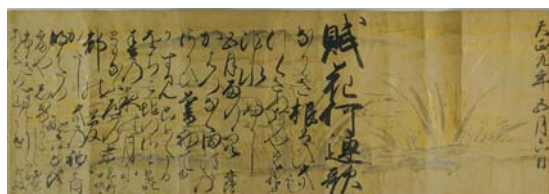
本書は、連歌研究の大家であった木藤才蔵氏 (1915 - 2014) の旧蔵書である。かつて当館の寄託であり、このたび寄贈された資料53点のうちの一つである。整理番号19-4。

卷子本1巻。表紙は金茶色地に金色で青海波を織り出した絹。外題は灰色の題簽に「連歌 百韻」。見返しは白茶色の地に金銀泥で描いた草花と金銀野毛切泊の装飾がほどこされている。本文料紙は斐紙、第1紙から第8紙まで、それぞれことなる図案の下絵を金銀泥で描いている。清書懐紙を卷子に仕立てたものと推測される。

発句は「ながき根はひきもつくさぬあやめ哉 紹巴」。連歌は、紹巴 (13句)・守隆 (水野・10句)・白 (聖護院道澄法親王の一字名・12句)・昌叱 (13句)・日野新中納言 (輝資・10句)・文閑 (10句)・式政 (8句)・正繁 (8句)・既在 (江村・7句)・紹与 (8句)・具滋 (1句)。『連歌総目録』に未収録。

なお、脇句をつとめる水野監物 丞守隆は、尾張知多郡常滑城主で、信長に仕えた武将である。『連歌総目録』によると天正2年 (1574) 4月10日「賦何木百韻」、同年5月8日「賦山何百韻」、同年5月某日「賦何人百韻」、天正3年 (1575) 5月13日「賦何路百韻」に出座しており、これら守隆が出座する百韻連歌は、いずれも発句を紹巴がつとめている。また天正2年5月8日「賦山何百韻」は、守隆が興行主で脇句もつとめている。

守隆の出座する連歌で管見に入るものの中で、本書は最も後の時期のものである。守隆は本百韻の翌年に起こった本能寺の変で明智光秀につき、変の翌日に光秀が安土城に登った時もそれに伴った。しかしその後、山崎の合戦で光秀が討ち死にし、守隆は入道して常滑城を出て京の嵯峨野に隠棲する。守隆の人生が一転することとなった本能寺の変の、およそ1年前に催されたのが本百韻であることを思うと感慨深い。(小山 順子)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日 平成29年 (2017) 1月25日
 編集 国文学研究資料館広報出版部
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館